

将来考える余裕ない

自宅の広い勉強部屋には戻れない。仮設住宅の片隅に置いた小さな勉強机には、目の前の薄い壁を通して、隣室の物音が嫌でも耳に飛び込んでくる。

「あー、集中できない」。来春に高校受験を控える沙也加さんが頭を抱えた。ただでさえ揺れ動く進路選びの時期。原発事故

のせいで、3回も転居を強いられた15歳に、落ち着いて高校や将来のことを考える余裕はない。「何とかなると考えるしかないよ」。樂觀とも不安ともつかない言葉を漏らすことが増えた。

それでも、今月下旬には教師と保護者を交えた三者面談で、進学希望先を絞り込まなくてはならない。

「でも、学校選び自体、安心してできる環境にないんです」と幸さん。自宅近くに

原発1キロからの避難
いつの日か

—23—

あった沙也加さんの志望校は今、会津地方を含む県内4カ所に分散して授業を続けているが、来春からはいわき市の1カ所に集約されると聞いたのだ。「原発周辺の多くの子どもが会津に避難しているのに、なぜ遠いところにまとめてしまうのか理解できない」。一家は春にいわきの仮設住宅に移る予定だが、会津に残る家庭のことを考えると怒りが込み上げてくる。沙也加さんは行き詰まった時、ふと最初

に避難した豊田市のことを考えることがある。そういえば最近、嬉しい手紙が届いたのだ。

【はなわ】さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。